全学教養科目「名大の歴史をたどる」

第２回「名古屋大学の源流から官立医科大学へ」

【今回のテーマ】

◆名古屋大学の源流はどこに求められるのか。
◆国（官）立大学となるまで、どのような道をたどったのか。
◆なぜ「名古屋」大学なのか。

1　名古屋大学の源流

①尾張藩種痘所の設置（1852）

◎伊藤圭介ら洋学者による西洋医学の受容

◎西洋式医学校設置の建議（1869～70）

②名古屋県仮病院・仮医学校の設置（1871、現愛知県産業貿易会館）

◎身分差別の撤廃、貧民医療の理念

◎旧尾張藩評定所の施設を利用した「仮」病院

◎旧藩校や私塾にも及ばない教育内容、学生もごく少数で品行不正

→翌年には廃止（財政難）→義病院としての復興もすぐ閉鎖

2　医学教育機関の復興

①仮病院の復興と医学講習場の設置（1873、現西本願寺別院）

◎公立医学所・公立医学講習所と改称（1876）

◎医学校としての体裁の整備

◎民費（地方税）徴収と地元からの寄付→地元に支えられる名大の端緒

③「お雇い外国人」の招聘（ヨングハンスとローレツ）→第 14 回

◎ブレーンとして、西洋医学による運営への転換を推進

◎西洋医学（精神医学や衛生行政）の発達・普及に貢献（←→西洋医学への不信）

④天王崎への移転（1877、現名古屋市中区栄 1 丁目 17～18 番地）→第 15 回

◎西本願寺別院の建物の仮住まいから本格的な施設へ
（県税、県内開業医・浄土真宗関係等からの寄付金）

◎引き続き病院と医学校が併設

3 愛知医学校・愛知病院

①公立医学校の独立（1878）→愛知医学校・愛知病院（1881）

◎医師の短期速成＝「中等教育機関」

◎「専門学校」へ（修業年限延長、入学資格引き上げ）

②後藤新平校長兼院長（代理 1879～、任 1881～1883）の改革

◎「お雇い外国人」から日本人学士への転換（熊谷幸之輔など）

◎学科目の充実、体系化

◎病院組織の充実などの経営努力

◎入学者増加のための取り組み
→甲種医学校に認定される（1883）＝日本有数の高等（医学）教育機関としての基礎

③存続の危機から安定へ

◎県会における「医学校連合共立に関する決議」（1885）、愛知医学校廃止決議（1886）

◎府県立医学校経費の地方税支弁禁止（1887）による危機
→独立採算制への移行、「前代の遺物」「変態学校」
→熊谷幸之輔校長を中心に結束、医学校を「死守継承」

◎「院校払い下げ」騒擾（1891）

◎経営の安定（←学生数の増加、給料の安い下級教員の増加）
→入学生の質低下＝開業医養成機関のまま

◎愛知県立医学校への改称（1901）

4 愛知県立医学専門学校

①愛知県立医学専門学校となる（1903）

◎専門学校令（1903）の適用
→名実ともに高等教育機関としてのスタート（地域の医師養成中心）

◎卒業生に「愛知医学得業士」、「愛知医学専門学校医学士」（1909～）

②鶴舞への移転（1914、現鶴舞キャンパス）→第 15 回

◎総工費 70 万円も県予算による支弁せず←県会の経費節減方針（官立移管への思惑）

◎大学昇格の基盤整備（熊谷校長）

③大学昇格運動の始まり
◎総合大学設置運動の開始

県会の建議（1918）「…本県に綜合大学を設置せられむことを望む…」

◎官立昇格運動（←大学令 1918）
学生・校友会（昇格期成同盟会）主導の運動
→名古屋の言論界、名古屋市会議員への波及（県当局や県会議員の支持）
→県から国へ 100 万円の寄付決定

◎文部省の拒否により、公立大学昇格運動へ転換

5 愛知医科大学から名古屋医科大学へ

①県立愛知医科大学への昇格（1920）＝愛知県初の大学
→学位（医学士）授与権、大学予科の設立
→愛知医科大学病院（1922）→愛知医科大学附属病院（1924）

②総合大学設置運動の展開

◎名古屋に総合大学の設置を求める建議全会一致可決（1926）

◎県会における総合大学設置建議案可決（1926、「名古屋」に設置）

◎名古屋綜合大学設立期成同盟会（1927）が設立

◎「名古屋市に綜合帝国大学を建設せられむことを望む」（1927 衆議院建議可決）
←日本第三の都市「名古屋市」への最高学府（総合（帝国）大学）設置願望

③官立名古屋医科大学の設立

◎総合大学創設に対する政府の消極姿勢→官立移管運動へ

◎官立移管の実現（1931）
←地元の支援（５万円ずつ 10 年間の寄付）
cf.満州事変の勃発（1931.9.18）→十五年戦争の中で総合大学をめざす